

# 激症型未熟児網膜症の網膜剝離の発生の機序

福岡大学医学部眼科

大島 健 司, 林 英 之, 高 尾 雄 平

## 緒 言

未熟児網膜症による失明の原因が主として網膜剝離であることは広く認められているが、この網膜剝離には出生後数ヶ月で早期に発症するものと、数年以上経過した後に発症する晩発生のものとの2種あることが知られている。この2種類の網膜剝離のうち、早期に発症する網膜剝離の原因にはいくつかのものが考えられている。まずI型網膜症により生ずる網膜剝離の原因が主として牽引性であることは認められているが、II型、混合型のいわゆる激症型の網膜症による網膜剝離については、従来滲出性のものではないかと考えられて来ている。しかし、我々は眼底検査と共に超音波検査を行なっているが、この検査結果によると、従来滲出性と考えられて来ている激症型の網膜剝離が、牽引性の要素の強いものであることを示していることがわかって来た。そこで今回、この結果を報告する。

## 検査方法及び機種

検査には主として接触型超音波検査機器であるBronson-Turner Ophthalmic B-scanを用い、時にSonometrix Coleman Ophthalmoscan Model 200を用いた。

対象は主に激症型未熟児で、眼底検査と同時に検査を行い、検眼鏡的検査結果と超音波所見を対比させた。

## 結 果

激症型網膜症の確定診断が辛うじてつかつかぬころ、つまり検眼鏡的には巾の広い無血管帯と、後極部血管の怒張蛇行、終末部の血管の吻合とhazy mediaが認められる頃に、すでに超音波では図Iの左上のように赤道部付近から水晶体後面に達する索状物がのびているのが認められる。更に進行すると、右上のように水晶体後面にいわゆるcyclitic membrane様のものの形成があり、

更に進行すると左下のように周辺部からcysticな網膜剝離が生じ全剝離いわゆるRLFの状態となってしまう。

この変化は、当初から光凝固や冷凍凝固をおこなっても剝離して行った症例でも、全く光凝固をおこなえなかった例でも全く同様である。

この変化の様子を模式図(図2)に示すと、まず検眼鏡でII型の診断がつくかつかないうちに赤道部付近から硝子体内へ索状物の形成があり、軽い網膜剝離が発症する頃には水晶体後面にcyclitic membrane様の形成があり最後に網膜全剝離RLFの状態となる。

## 考 察

未熟児において、赤道部付近から硝子体内への索状物が形成されると、何故網膜の全剝離を来たすかという点について、我々は次の様に考えている。まず第一に未熟児の硝子体には胎生期の遺残物が多く、成人と違ってtractusがなく、したがって層状の構造でないため一部の硝子体に起った変化が硝子体全体に広がり易い。また第2に毛様体扁平部が短かく、鋸状縁が近いので、硝子体基部付近の変化がすぐに水晶体まで広がり易い。第3に硝子体と網膜の接着力が強いので硝子体の収縮などの変化が網膜におよび易いなどである。

従来、滲出性と考えられていた網膜剝離が、このように牽引性の要素の強いもの(滲出性が全く否定されたわけではない。)であることが超音波検査の結果証明されたことになる。このことが他の研究者により広く認められるならば、未熟児網膜症の治療においても従来とは全く考えを改めなければならないことになる。即ち、現在でもステロイドの有効性については疑問視する傾きが強かったが滲出性の剝離でなく、牽引性の剝離であるならばステロイドの投与はその意義を失うことになるわけである。ただし、牽引性の変化を来たす過程をとめるのに有効であるとするならばまた別で

あるが。

従って、今後は牽引性の網膜剥離は治癒させるために、牽引性の要素を除くように、治療方針を変換して行かねばならない。

眼鏡的所見と対比しながら、超音波検査の像を示した。その結果、この網膜剥離は従来考えられていたような滲出性のもというより、牽引性の要素の強いものであることを示した。

### ま と め

激症型未熟児網膜症の早期網膜剥離の経過を検

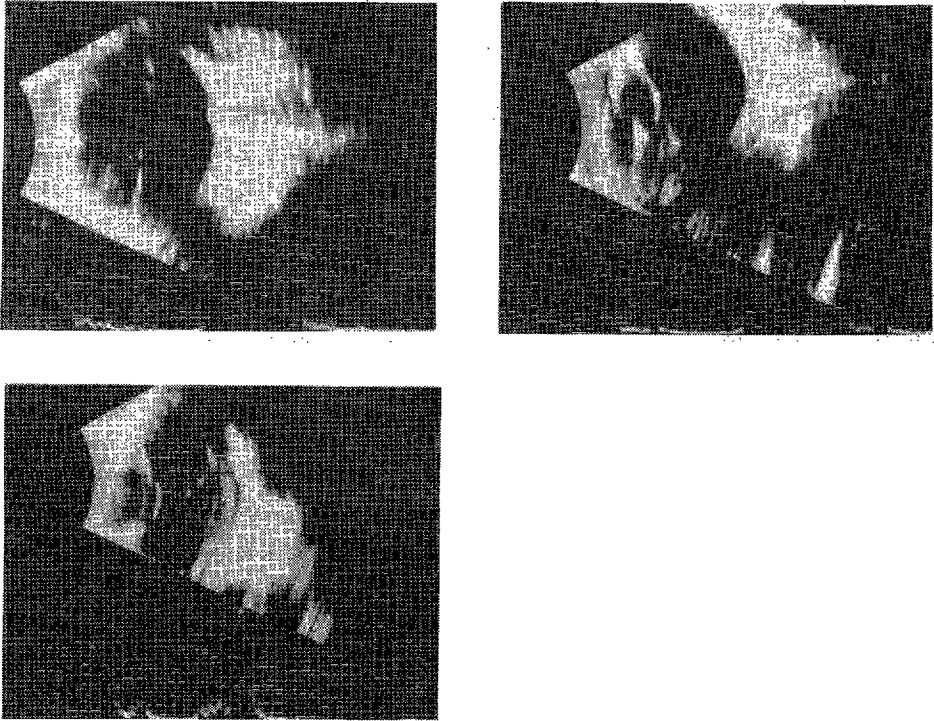


図1

#### II 激症型未熟児網膜症の網膜剥離への経過

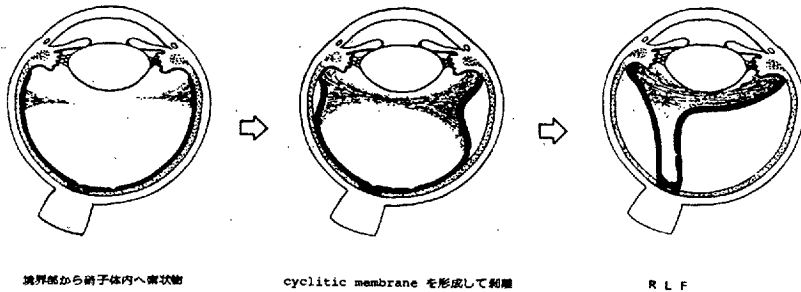
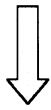
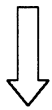


図2



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



## 緒言

未熟児網膜症による失明の原因が主として網膜剥離であることは広く認められているが、この網膜剥離には出生後数ヶ月で早期に発症するものと、数年以上経過した後に発症する晩発生のものとの2種あることが知られている。この2種類の網膜剥離のうち、早期に発症する網膜剥離の原因にはいくつかのものが考えられている。まず 型網膜症により生ずる網膜剥離の原因が主として牽引性であることは認められているが、 型、混合型のいわゆる激症型の網膜症による網膜剥離については、従来滲出性のものではないかと考えられて来ている。しかし、我々は眼底検査と共に超音波検査を行なっているが、この検査結果によると、従来滲出性と考えられて来ている激症型の網膜剥離が、牽引性の要素の強いものであることを示していることがわかって来た。そこで今回、この結果を報告する。